世界遺産情報誌 No.9

紀伊山地の霊場と参詣道

三重県　奈良県　和歌山県

Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range

世界遺産にかかわった先人たち

南方熊楠

南方熊楠

南方熊楠（みなかたくまぐす）は博物学者、民俗学者、細菌学者、天文学者、人類学者、考古学者、生物学者であり、その博識ぶりから「歩く百科事典」と呼ばれていました。江戸時代末の慶応（けいおう）3年（1867）に和歌山市の金物商の家に生まれました。現在の東京大学に行きましたが、すぐに自主退学して、20歳でアメリカに渡り、25歳の時に今度はイギリスに渡り、大英博物館で研究したりして、世界各地で発見、採集した菌類などに関する記事を、有名な科学雑誌「ネイチャー」などに次々と寄稿しました。世界の19カ国の言語を理解していたとも言われ、日本だけでなく、アメリカ、イギリス、中南米まで訪れ、さまざまな研究をしました。キューバで採集旅行中に資金が尽きた熊楠は、サーカス団の一員としてハイチやジャマイカなど2カ月あまり巡っています。イギリスからの帰国後は田辺市に定住し、主として粘菌（ねんきん）の研究に没頭しました。

さて、このように偉大な国際的研究者であった南方熊楠と世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」はどのようなかかわりがあるのでしょうか。

徳川幕府による江戸時代が終わり、明治政府は国家神道（しんとう）の権威を高めるために「神仏分離令（しんぶつぶんりれい）」を出し、明治39年（1906）頃から各集落にある神社を村社（そんしゃ）にまとめ、日本書記などの古文書に記載された神社だけをのこす「神社合祀令（ごうしれい）」を出しました。この結果、和歌山では3700あった神社が600まで減らされました。廃止された神社の森の樹木はことごとく伐採され、高値で売られていきました。この中には樹齢千年を超える巨木やご神木といわれていたものもありました。熊野信仰は古来の自然崇拝に仏教や修験道（しゅげんどう）などが結びついて成り立った宗教であったため、関係する神社は合祀の対象になりやすかったのです。

熊楠は激怒しました。神社の森にはまだ未解明の苔類（こけるい）や粘菌が多く棲（す）み、伐採されると絶滅

するのです。生物は互いにつながっていて、目に見えない部分で全生命が結ばれていると訴え、生態系を守るという立場から明治政府の神社合祀令に徹底的に反対しました。当時の日本人はまだ生態系という考えをもっておらず、熊楠が日本最初の「エコロジスト」だと言われています。

さらに熊楠は民俗学・宗教学の観点から人間と自然とのかかわりを研究しており、人々の生活に密着した神社の森は、子供の頃に遊んだり、祭りの思い出があったり、ただの木々ではない、鎮守の森の破壊は心の破壊だと訴えました。こうして、熊楠は日本の環境保護活動の先駆者となったのです。

熊楠の運動が実を結び、大正9年（1920）には国会で神社合祀は無益の決議がなされました。熊楠によって守られたのは現在、世界遺産として登録されている那智原始林や熊野古道中辺路にある継桜王子の野中の一方杉と呼ばれている巨木、高原熊野神社の楠の巨木などがあります。熊野古道を歩いた時には南方熊楠のことを心の片隅で思い出して下さい。

熊楠には大変有名なエピソードがあります。植物学者でもあった昭和天皇は熊楠の粘菌研究にも興味をもたれており、昭和4年（1929）に紀南行幸が実現し、熊楠が御前講義をしました。田辺湾の神島などを熊楠は案内して、その後、キャラメルの箱に入れた110種類の標本を献上しました。当時は天皇への献上品は高級な桐の箱などに入れるのが慣例でした。熊楠が亡くなった後、天皇は「あのキャラメル箱のインパクトは忘れられない。」と語られたそうです。さらに昭和37年（1962）に33年ぶりに和歌山を訪れ、神島を見てこう詠まれています。「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」。

（肖像写真：田辺市教育委員会提供）

継桜王子にある野中の一方杉（推定樹齢800年）

地球環境に配慮した紙と大豆油インキを使用しています。PRINTED WITH SOY INK